

## 5 文献等の調査

安倍氏関連および鳥海柵の記載のある文献について、成立年代順に記した。文献の編著者と成立年代は国史大辞典、青森県史、各文献掲載図書を参考とした。（ ）内は参照した文献掲載図書について、編著者名、出版年、書名、出版・発行者の順で記した。

- 十一世紀『陸奥話記』藤原明衡か（塙保己一 1932 年『群書類従 第二十輯 合戦部』続群書類従完成会）
- 万寿三年～天喜二年 『春記』 藤原資房  
（増補「史料大成」刊行会 1965 年『増補史料大成 第 7 巻』臨川書店）  
（青森県史編さん古代部会 2001 年『青森県史 資料編 古代 1 文献史料』青森県）
- 康平五年（1062）『康平記』 平定家（塙保己一 1932 年『群書類従 第二十五輯 雑部』続群書類従完成会）
- 康平五年～天仁元年（1062～1108） 『水左記』 源俊房  
（増補「史料大成」刊行会 1965 年『増補史料大成 第八巻』臨川書店）
- 寛治八年～嘉承二年（1094～1107） 『扶桑略記』 皇円か  
（黑板勝美 1932 年『新訂増補國史大系第十二巻 扶桑略記 帝王編年記』吉川弘文館）
- 寛治元年～保延四年（1087～1138）『中右記』藤原宗忠（川又馨一 1934 年『史料大成（中右記三）』内外書籍株式會社）
- 永久四年～長承元年（1116～1132）『朝野群載』 三善為康 編  
（黑板勝美 1938 年『新訂増補國史大系 第二十九巻上 朝野群載』吉川弘文館）
- 十二世紀前半 『今昔物語集』 編著者不詳  
（黑板勝美 1931 年『新訂増補國史大系 第十七巻 今昔物語集 本朝』吉川弘文館）
- 十二世紀前半 『十三代要略』 編著者不詳  
（塙保己一 補・太田藤四郎 1925 年『続群書類従 第七輯上 系図部』続群書類従完成会）
- 十二世紀 『諸道勘文』 中原師安か（塙保己一 1932 年『群書類従 第二十六輯 雑部』続群書類従完成会）
- 保延三年～仁平四年（1137～1154） 『中外抄』 藤原忠実談 中原師元筆録  
（後藤昭雄他校注 1997 年『新日本古典文学大系 32 江談抄 中外抄 富家語』岩波書店）
- 永治元年～久寿二年（1141～1155） 『本朝続文粹』 編著者不詳  
（黑板勝美 1941 年『新訂増補國史大系 第二十九巻下 本朝文粹 本朝續文粹』吉川弘文館）
- 久安七年～応保元年（1151～1161） 『富家語』 藤原忠実談 高階仲行編  
（後藤昭雄他校注 1997 年『新日本古典文学大系 32 江談抄 中外抄 富家語』岩波書店）
- 建久二年（1191） 『宮根山縁起』 信救（塙保己一 1932 年『群書類従 第二輯 神祇部』続群書類従完成会）
- 十三世紀 『平治物語』 編著者不詳  
（永積安明・島田勇雄校注 1961 年『日本古典文学大系 31 保元物語 平治物語』岩波書店）
- 建暦二年～承久三年（1212～1221） 『宇治拾遺物語』 編著者不詳  
（黑板勝美 1932 年『新訂増補國史大系第十八巻 宇治拾遺物語 古事談 十訓抄』吉川弘文館）
- 十三世紀前半 『平家物語』 編著者不詳  
（池邊義象 1913 年『國文叢書第五巻 保元物語 平治物語 平家物語』博文館）  
（高木市之助他校注 1959 年『日本古典文学大系 32 平家物語 上』岩波書店）  
（高木市之助他校注 1960 年『日本古典文学大系 33 平家物語 下』岩波書店）
- 十三世紀中頃 『前九年合戦絵詞』 編著者不詳  
（小松茂美編 1983 年『続日本絵巻大成 17 保元物語 平治物語 平家物語』中央公論社）
- 貞応二年～永仁五年（1223～1297） 『保元物語』 編著者不詳  
（永積安明・島田勇雄 1961 年『日本古典文学大系 31 保元物語 平治物語』岩波書店）  
（栃木孝惟他校注 1992 年『新日本古典文学大系 43 保元物語 平治物語 承久記』岩波書店）
- 建長四年（1252） 『十訓抄』 編著者不詳  
（黑板勝美 1932 年『新訂増補國史大系第十八巻 宇治拾遺物語 古事談 十訓抄』吉川弘文館）
- 建長六年（1254）『古今著聞集』橘成季（黑板勝美 1930 年『新訂増補國史体系第十九巻 古今著聞集 愚管抄』吉川弘文館）
- 正元元年～文永十一年（1259～1274） 『百鍊抄』 編著者不詳（黑板勝美 1979 年『百鍊抄』吉川弘文館）
- 十三世紀後半 『一代要記』 編著者不詳（史籍集覧研究會 1967 年『改訂史籍集覧 第一冊』すみや書房）
- 文永年間～嘉元年間（1264～1306）『吾妻鏡』鎌倉幕府編纂（早川純三郎編 1915 年『吾妻鏡 吉川本 第一』吉川弘文館）

- 永仁三年（1295）『鳩嶺集』 良秀 撰 （宮内庁書陵部 1972 年『図書寮叢刊 平安鎌倉未完詩集』）
- 十四世紀前半『八幡愚童訓』編著者不詳（塙保己一 1932 年『群書類従 第一輯 神祇部』統群書類従完成会）
- 十四世紀前半『園城寺伝記』編著者不詳（佛書刊行会編纂 1915 年『大日本仏教全書 127』佛書刊行会）
- 建武元年（1334）『中尊寺文書』編著者不詳（平泉町史編纂委員会 1985 年『平泉町史 史料編一』平泉町）
- 貞和三年（1347）『奥州後三年記』玄慧（鈴木省三編集・発行 1922 年『仙台叢書 第一巻』仙台叢書刊行会）
- 貞和五年（1349）『梅松論』編著者不詳（塙保己一 1932 年『群書類従 第二十輯 合戦部』統群書類従完成会）
- 貞治三年～暦暦二年（1364～1380）『帝王編年記』 永祐 撰  
（黑板勝美 1932 年『新訂増補國史大系第十二巻 扶桑略記 帝王編年記』吉川弘文館）
- 十四世紀『神皇正統記』 北畠親房  
（塙保己一 補・太田藤四郎 1925 年『統群書類従 第二十九輯 上 雑部』統群書類従完成会）  
（塙保己一 1932 年『群書類従 第三輯 帝王部』統群書類従完成会）
- 十四世紀『源平盛衰記』 編著者不詳  
（三浦理 1917 年『有朋堂文庫 源平盛衰記 上』有朋堂書店）  
（塚本哲三 1917 年『有朋堂文庫 源平盛衰記 下』有朋堂書店）  
（青森県史編さん古代部会 2001 年『青森県史 資料編 古代 1 文献史料』青森県）
- 十四世紀後半『神明鏡』 編著者不詳  
（塙保己一 補・太田藤四郎 1925 年『統群書類従 第七輯上 系図部』統群書類従完成会）
- 十四世紀後半『歴代皇紀』 洞院公賢 甘露寺親長（史籍集覧研究会 1969 年『改訂史籍集覧 第 18 冊』すみや書房）
- 永正三年（1506）頃か『藤崎系図』 編著者不詳  
（塙保己一 補・太田藤四郎 1925 年『統群書類従 第七輯上 系図部』統群書類従完成会）
- 永正三年（1506）頃か『安藤系図』 編著者不詳  
（塙保己一 補・太田藤四郎 1925 年『統群書類従 第七輯上 系図部』統群書類従完成会）
- 十四世紀前半～十六世紀後半『義経記』 編著者不詳（岡見正雄校注 1959 年『日本古典文学大系 37 義経記』岩波書店）
- 十六世紀『佐竹系図』編著者不詳（塙保己一 補・太田藤四郎 1925 年『統群書類従 第五輯上 系図部』統群書類従完成会）
- 正保年間（1644～1648）成立『南部領内総絵図』（盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』）
- 寛文二年（1662）『奥羽軍記』（鈴木省三編集・発行 1922 年『仙台叢書 第一巻』仙臺叢書刊行會）
- 寛文十年（1670）『續本朝通鑑』 林羅山・鷲峰（早川純三郎 1919 年『内閣御文庫原本 本朝通鑑 第六』國書刊行會）
- 享保四年（1719）『奥羽観蹟聞老志』 佐久間義和  
（鈴木省三 1928 年『仙台叢書 奥羽観蹟聞老志 上』仙臺叢書刊行會）  
（鈴木省三 1929 年『仙台叢書 奥羽観蹟聞老志 下』仙臺叢書刊行會）
- 江戸中期『祐清私記』 伊藤祐清（南部叢書刊行會 1928 年『南部叢書第三冊』南部叢書刊行會）
- 寛延四年（1751）『平泉実記』 相原友直（相原友直 1974 年『平泉実記 復刻版』一関プリント社出版部）
- 寛延四年（1751）『増補行程記』 清水秋全  
（清水秋全画・文 細井計編 1999 年『新南部叢書特装版 奥州道中【増補行程記】』東洋書院）
- 宝暦十三年（1763）『風土記書出』（金ケ崎町町史編さん委員会 1965 年『金ケ崎町史』金ケ崎町）
- 宝暦（1751～1764）の頃成立か『御領分社堂』（盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』）
- 安永元年（1772）『伊澤郡西根邑之内金箇崎諏訪大明神畧縁記』 編著者不詳  
（金ケ崎町中央生涯教育センター 2004 年『白糸まちなみ交流館企画展図録 金ケ崎の修験道』）
- 明和九年（安永元年 1772）『封内風土記』 仙台藩 編纂  
（平重道 1975 年『復刻版 仙台叢書 封内風土記 第三巻』宝文堂出版販売）
- 安永五年（1776）『風土記書出』（金ケ崎町町史編さん委員会 1965 年『金ケ崎町史』金ケ崎町）
- 安永七年（1778）『諏訪祠碑』 編著者不詳  
（金ケ崎町教育委員会 1991 年『金ケ崎の古文書 一参一』金ケ崎町文化財報告書第 20 集）
- 安永七年（1778）『八幡祠碑』 編著者不詳  
（千葉貞一 2010 年『「安永風土記」の贈りもの-岩手県南地方「安永古碑」の成立-』）
- 安永七年（1778）『安永風土記』 編著者不詳  
（宮城縣 宮城縣史編纂委員会 1987 年『宮城縣史復刻版 28(資料篇 6)』宮城縣史刊行会）
- 安永年間（1772～1781）か『平泉雑記』 相原友直（南部叢書刊行會 1928 年『南部叢書第三冊』南部叢書刊行會）
- 寛政年間（1789～1801）か『封内郷村志』 大巻秀詮  
（南部叢書刊行會 1929 年『南部叢書第五冊』南部叢書刊行會）

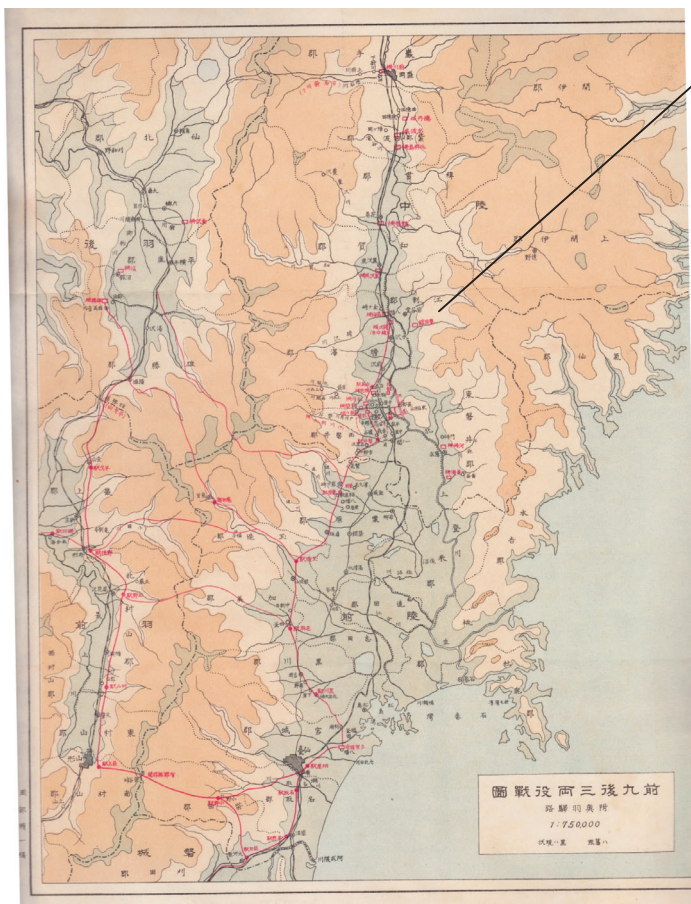
- (盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 文化三年(1806) 『舊蹟遺聞』 三輪秀福、阪牛助丁、梅内祐訓  
(南部叢書刊行會 1929 年『南部叢書第七冊』南宮 3-15  
(盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 文政四年～文政十年(1821～1827) 『甲子夜話』 松浦静山  
(中村幸彦・中野三敏校訂 1977 年『甲子夜話 3 東洋文庫 321』平凡社)
- 文政五年(1822) 頃『かすむ駒形』菅江真澄(内田武志・宮本常一 1971 年『菅江真澄全集 第一巻』未来社)
- 文政六年(1823)『鹽松勝譜』舟山萬年(鈴木省三 1926 年『仙台叢書別集第四巻』仙臺叢書刊行會)
- 文政九年(1826)『雪の出羽路』菅江真澄(内田武志・宮本常一 1976 年『菅江真澄全集 第六巻』未来社)
- 文政十二年(1829)『月の出羽路』菅江真澄(内田武志・宮本常一 1978 年『菅江真澄全集 第七巻』未来社)
- 文政十二年(1829) 『月の出羽路 仙北郡』菅江真澄(内田武志・宮本常一 1979 年『菅江真澄全集 第八巻』未来社)
- 文政～天保二年(1818～1831) か『内史畧』横川良助(盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 嘉永四年(1851)『東北遊日記』吉田松陰(吉田常吉他校注 1978 年『日本思想大系 54 吉田松陰』岩波書店)
- 明治十三年(1880) 『岩手県管轄地誌』 嶋惟精 他  
(岩手県 2003 年『岩手県管轄地誌 第 8 巻胆沢郡(全)』東洋書院)
- (盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 明治三十四年(1901) 頃 『奥々風土記』 江刺恒久  
(南部叢書刊行會 1927 年『南部叢書 第 1 冊』南部叢書刊行會)
- (盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 明治三十九年(1906) 『大日本史』 彰考館  
(義公生誕三百年記念會 1928 年『大日本史卷之四十二 本紀第四十二』大日本雄辯會)  
(義公生誕三百年記念會 1929 年『大日本史卷之一百三十七 列傳第六十四』大日本雄辯會)  
(義公生誕三百年記念會 1929 年『大日本史卷之一百四十三 列傳第七十』大日本雄辯會)  
(義公生誕三百年記念會 1929 年『大日本史卷之一百四十四 列傳第七十一』大日本雄辯會)  
(義公生誕三百年記念會 1929 年『大日本史卷二百二十八 列傳一百五十五』大日本雄辯會)  
(義公生誕三百年記念會 1929 年『大日本史卷之三百一 志第五十八』大日本雄辯會)
- 明治三十九年(1906) 『大日本地名辞書』 吉田東伍(吉田東伍 1970 年『増補大日本地名辞書 第 7 巻 奥羽』富山房)
- 明治四十三年(1910) 『遠野物語』 柳田國男(柳田國男 1972 年『遠野物語』大和書房)
- 大正五年(1916)『奥羽沿革史論』日本歴史地理學會(日本歴史地理學會 1916 年『奥羽沿革史論』仁友社)
- 大正十年(1921)『金ヶ崎村史』(金ヶ崎町 1921 年『金ヶ崎村史』)
- 大正十二年(1923)『金ヶ崎村鳥海柵を踏査するの記(一)～(六)』(岩手日報社 1923 年 11 月 24 日～12 月 4 日)
- 大正十四年(1925)「姫戸考」 蕉鹿夢(伊能嘉矩)『岩手毎日新聞 1.27、28』  
(盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 大正十四年(1925)『鎮守府八幡宮と膽澤城趾』 佐藤長三郎(佐藤長三郎 1925 年『鎮守府八幡宮と膽澤城趾』龜梨書店)
- 昭和二年(1927) 『胆沢郡誌』 (藤原正人 1974 年『日本郡誌史料集成 東北地方 胆沢郡誌』明治文献)
- 昭和九年(1934) 『金ヶ崎町誌』 (金ヶ崎町 1934 年『金ヶ崎町誌』)
- 昭和十年(1935)「前九年戦役ニ関スル話」佐々木正郎『南部史談會誌 第廿號』南部史談會  
(盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 昭和十五年(1940) 『岩手県郷土誌』 澤田久雄(澤田久雄 1940 年『岩手県郷土誌』日本書房)
- 昭和十六年(1941) 『岩手郡誌』岩手縣教育会岩手郡部會  
(盛岡市遺跡の学び館 2012 年『検証！厨川柵-古代末期のもりおか-』)
- 平成二年～平成八年(1190～1996)『石巻の歴史』  
(石巻市史編さん委員会 1990 年『石巻の歴史 第九巻資料編 3 近世編』石巻市)  
(石巻市史編さん委員会 1994 年『石巻の歴史 第十巻資料編 4 近・現代編』石巻市)  
(石巻市史編さん委員会 1996 年『石巻の歴史 第一巻通史編(上)』石巻市)

※風土記書出掲載のため





『増補行程記』寛延四年(1751) 清水秋全 (もりおか歴史文化館蔵)



『奥羽沿革史論』付図「前九後三両役戦圖」 大正五年(1916) 岡部精一稿



## 6 鳥海柵跡の歴史的価値

鳥海柵跡は、奥羽山脈と北上山地との間に位置する南北に細長い北上低地帯の中にある。この一帯は、かつて奥六郡と呼ばれた土地である。

本遺跡は、六原扇状地南扇端の段丘縁に立地し、東と南を北上川と支流の胆沢川が流れる。7～8世紀の大集落(西根遺跡)と古墳群(縦街道古墳群)が発掘調査で確認されている。同古墳群は、明治30年(1897)に文学博士の三宅米吉氏が「最北の古墳」として調査し、古くから注目されていた。これまでの調査で9世紀初めの遺構はなく、9世紀後半以降の遺構が確認されている。胆沢川対岸2kmにある胆沢城造営時に集落は消え、大改修後に再び利用され始めたと想定される。鳥海区域西部のSI01 堅穴建物跡からは、「五保」の墨書土器や緑釉陶器唾壺が出土した。以降、胆沢城が衰退する10世紀中頃までは、原添下区域南西部、鳥海区域北西部で堅穴建物跡の存在が確認されている。越州窯産青磁器碗や「介」及び「萬」と墨書された土器があり、胆沢城との関わりの深さが窺える。胆沢城の衰退とあわせるように、本遺跡では10世紀後半以降の遺構は検出されていない。

本遺跡から遺構や遺物が最も検出される時期は、11世紀前半～中頃(Ⅲ期)であり、11世紀前半(Ⅲ-1期)と中頃(Ⅲ-2期)に細分される。Ⅲ-1期には、縦街道南区域で大型の掘立柱建物(SB01・02)が現れる。建物跡の柱掘方は平面形が円形で、廂と身舎の規模や柱間寸法が同じである。胆沢城跡の建物跡と比較すると、柱掘方の平面形が隅丸方形ではなく円形である点、身舎の桁行が5間ではなく3間である点に違いがある。また、柳之御所遺跡の建物跡と比較すると、身舎よりも廂の柱掘方の規模が小さい点に違いがある。本遺構は双方の建物跡の間に位置する遺構と想定される。出土遺物は、土師器小皿・坏・高台坏・皿・柱状高台皿、内黒土師器坏・高台坏であり、胆沢城最終末に継続する器種構成である。二ノ宮後区域では堅穴建物4棟、柵(塀)が配される。原添下区域では明確な遺構はないが、南・西側段丘(第二沢)付近から土師器が出土している。11世紀前半は、『陸奥話記』によれば安倍頼良の祖父忠頼が東夷の酋長として「威名大いに振い、部落みな服す」時期、『範国記』によれば父忠良が陸奥権守に任ぜられた時期(1036年)とされる。本遺跡は、縦街道南区域の大型建物を中心に、縦街道南区域、原添下区域南西部、鳥海区域北部、二ノ宮後区域が使用されていた。沢等の自然地形を利用し、小規模な溝等は存在するが、大規模な防御施設である人工の堀はなかったとみられる。縦街道南区域の大型建物からは官人が身につける鍔帯の鉸具、胆沢城にもみられる水晶玉が出土したが、安倍氏が胆沢城の権力を背景に台頭した鳥海柵の始動期と想定される。

Ⅲ-2期には、原添下区域南東部に四面廂付と廂無の掘立柱建物(SB01・02)、堅穴建物3棟(SI01～03)が配され、周囲を囲むようにL字状の堀(SDⅡ)が掘られていた。堅穴建物跡からは鉄滓が出土し、鍛冶を営んでいたことが想定される。同区域の西部は、第二沢付近から複数の柵や塀で区画された空間があり、ロクロピットや焼土遺構から土器生産が、溝跡出土の鋳型から鋳造が行われていた可能性がある。南・西側段丘下(第二沢)からは土師器が大量に出土したが、生産した土師器の失敗品か柳之御所遺跡の堀等から出土する土器のように使い捨ての性格を備えた土器で、第二沢は廃棄の場であったと窺える。鳥海区域は、北と南の沢を結ぶように大規模な直線状

の堀跡(SDⅠ)が南北に掘削され、大規模な方形区画(南北約 140m、東西約 170m)が造られていた。堀は両側に土盛が、堀の西面壁に柵が造られていたと考えられる。区画内の南東部には 5×2 間の建物、北側縁に櫓と柵、南側縁に柵や塀等の遮蔽施設があったと考えられる。二ノ宮後区域は、中心となる掘立柱建物、櫓状建物、鉄滓堆積地や石蓋ピット、柵(塀)が配される。大きくⅢ期とした遺構には、鳥海区域西部の掘立柱建物 3 棟(SB01～03)、中央部北側の柵列・門跡がある。同区域の堀と建物 3 棟は軸線がほぼ同じことから同時期の可能性がある。また、二ノ宮後区域の焼土遺構も同じく大きくⅢ期としたが、Ⅲ-1 期の竪穴建物、Ⅲ-2 期の鉄滓堆積地や石蓋ピットを含めると、製鉄遺跡の柏木遺跡(宮城県多賀城市)や萩沢Ⅱ遺跡(宮古市)と類似する。

11 世紀中頃は『陸奥話記』によれば、安倍頼良が「衣川外」に出て鎮守府領から国府領に勢力を拡大する時期、前九年合戦の時期とされる。また同文献には、鳥海柵の構造に関する記述は「柵中の一屋に醇酒数十甔あり。」のみだが、厨川柵は「件(厨川)の柵の西北は大澤、二面は河を阻つ。河岸三丈有余、壁立ちて途なし。其の内に柵を築き、自ら固くす。柵の上に楼櫓を構え、鋭卒之に居る。河と柵との間、亦隍を掘る。」とあり、「隍(堀)」「楼櫓」「柵」があったと想定される。本遺跡は『陸奥話記』にある厨川柵とよく似た立地であり、Ⅲ-2 期には大規模な堀を造成して区画した台地に櫓や柵を設け、軍事的性格を強めた館になったと考えられる。

11 世紀後半の遺構は確認されておらず、12 世紀の遺構としては、原添下区域南西部の竪穴状遺構がある。同遺構はその構造から経塚の可能性があり、柳之御所遺跡にみられる中国産の陶磁器、国内産の陶器、土師器皿、小皿、手づくねかわらが出土しているが、奥州藤原氏による吊いを意味するものであろうか。

『増補行程記』や『風土記御用書出』等の近世の記録は、本遺跡が鳥海柵であるとして語り継がれてきた証拠と考える。近代に入ると、大正 12 年 11 月 24、25 日の宮内省諸陵寮考証課考証官の笹原助氏、和田軍一氏が、鳥海柵跡を調査し、「柵として申分なき地形である。」と語っている。鳥海柵擬定地として古くから検討されていた。鳥海柵擬定地の他 8 箇所は結び付く伝承はほぼなく、調査結果からも 11 世紀代の遺構が現段階までは確認されていない。本遺跡は、昭和 33 年以降発掘調査が行われ、『陸奥話記』等の文献の研究も進展し整理した結果、本遺跡は『陸奥話記』にみられる安倍氏の柵の「隍(堀)」「楼櫓」「柵」等の遺構が確認されており「鳥海柵」であると考えられる。

最後に、五味文彦氏から「十一世紀に安倍氏の鳥海柵・楯を中心とした奥六郡の支配が原型となって、十二世紀には藤原氏の平泉館を中心とした陸奥・出羽の支配が行われるようになり、さらに十三世紀は鎌倉の幕府御所を中心とした東国の支配へと発展していったのである。(中略)地域が主体となる中世の社会は鳥海柵から始まったといっても過言ではなく、地方分権の発祥の地は金ヶ崎にあった。」(五味文彦 2011 年「地方分権の黎明 鳥海柵跡(岩手県金ヶ崎町)」)との考え方が示されており、今後の発掘調査によって、11 世紀の歴史を埋めるだけではなく、日本の中世の始まりを『陸奥話記』等の文献と比較研究しながら明らかにできる遺跡として重要であるといえよう。

以上から鳥海柵跡の史跡としての価値をまとめてみると、以下の 4 点をあげることができる。



- 1 前九年合戦（永承 6 年〈1051〉から康平 5 年〈1062〉）を叙述した軍記物語『陸奥話記』に記された鳥海柵として明らかになったこと。
  - ・本史跡はこれまでも鳥海柵跡の有力な伝承地のひとつであったが、金ケ崎町教育委員会による発掘調査により、鳥海柵跡であることが確定的となった。
  - ・柵跡は段丘崖と、自然の沢を巧みに利用した防御性の高い構造をなし、新たに掘削した堀により、複数の郭から構成されている。
  - ・出土遺物は安倍氏が台頭し、全盛期を迎える 11 世紀の遺物が中心である。
  - ・鳥海柵が文献に登場する前九年合戦の時期（11 世紀中頃）の遺構として堀や櫓状建物、四面廂付建物、堅穴建物等があり、それにやや先行する時期のものとして四面廂付建物、堅穴建物、溝等がある。
  - ・安倍氏の館（柵）の具体的構造とその変遷を知ることができる。
- 2 鳥海柵は『陸奥話記』にみえる 12 の柵のうち、拠点とみなし得る柵であること。
  - ・頼時の三男宗任が館主（柵主）と考えられる。
  - ・天喜 5 年（1057）、安倍富忠との戦いにおいて流れ矢で負傷した頼時は、この鳥海柵に戻って亡くなっている。
  - ・康平 5 年（1062）9 月 11 日、鳥海柵に入った将軍頼義は、士卒を休ませるとともに、「数年来、鳥海柵の名を聞いていたが、それを見ることができなかった。今日初めて入ることができた。」と清原武則の忠節を讃え、厨川柵攻撃の態勢を整えている。
- 3 鳥海柵と他の柵との関係は、安倍氏の軍勢力の規模や構造を知るとともに、奥六郡と呼ばれた地域の支配のあり方を知るうえで重要であること。
  - ・9～10 世紀の胆沢城による支配に後続する段階の遺跡であり、律令支配のなかからどのようにして安倍氏が台頭するのかを知るうえで重要である。
  - ・12 世紀における奥州藤原氏、さらに 13 世紀における鎌倉幕府による東国支配の前史をなす社会のあり方を知るうえで重要である。
- 4 奥六郡のうち、鳥海柵が位置する胆沢郡は北部四郡の南端に位置する和賀（和我）郡に接している。そのことは鳥海柵の立地を考えるうえで重要であるばかりでなく、金ケ崎町の歴史的環境を考えるうえで重要であること。
  - ・胆沢城の造営や郡が設けられる以前は、胆沢川、黒沢川の北岸にしねたてかいどうあげば古墳、さんたんだくわきだごろうやしきあすかだどうば古墳等の古墳群がみられ、西根遺跡等に集落を営んだ人々による境界があったとみられる。
  - ・胆沢、江刺、磐井郡は延暦 23 年（804）頃に設置され、胆沢郡が北端に位置する。わが・ひえぬいしわにほんこうき・葦縫・斯波三郡は、『日本後記』によると弘仁 2 年（811）に同時に設置され、和我郡は南端に位置し、胆沢郡や江刺郡と接する。
  - ・鳥海柵が位置する胆沢郡は、中世には葛西領の北限に位置し、その家臣柏山氏が大林城（金ケ崎町）に居城し郡を治めた。近世には伊達領の北限に位置し、なんぷりようだてりようさかいつか南部領伊達領境塚が築かれ、奥州街道最北の要所「金ケ崎要害」が配された。
  - ・鳥海柵の立地は胆沢郡北端に位置する段丘上にある政治的拠点であり、同じ立地の金ケ崎要害につながる要素がある。本史跡は境界性を物語る遺跡のひとつであると考えられる。